

奥州市胆沢区

さく や し き い せ き  
作屋敷遺跡

現地説明会資料



平成23年8月6日(土)

(公財)岩手県文化振興事業団

埋蔵文化財センター

## はじめに

作屋敷遺跡は奥州市胆沢区南郡田地内の独光・作屋敷にあって、古代城柵「胆沢城跡」とは北東方向に9kmほど離れています。遺跡は河岸段丘(水沢段丘高位面)上に立地し、遺跡範囲は東西600m、南北400mにわたります。これまで平成5年には胆沢町教育委員会が、平成20年には当埋蔵文化財センターが発掘調査を行い、平安時代の集落跡を主体とする遺跡であることが明らかとなっています。

## たてあなじゅうきよあと 竪穴住居跡(8棟)

奈良時代(3棟)から平安時代(5棟)にかけて(今からおよそ1,200~1,300年前)の竪穴住居跡が、全部で8棟見つっています。大きさは一辺が3.5~5.0mほどで、形は方形と思われます。平安時代の住居の中には、一辺が6.5mほどの大形住居もありました。住居に付属



▲奈良時代の竪穴住居跡—中央奥がカマドの跡

する施設にカマドがありますが、作屋敷遺跡では奈良時代には北西や北東壁に、平安時代には東壁に設置されていました。

## じゅうきよじょういこう 住居状遺構(3棟)

カマド施設を持たないものを住居状遺構としました。うち1棟は、壁に沿って周囲に溝が巡っているもので、他の2棟は床面に多くの土坑を伴っています。これらは作業場か、ものづくりの工房跡と考えていますが、それを裏付けるような遺物は出土していません。



▲周囲に溝が巡る住居状遺構

## ほったてばしらたてものあと 掘立柱建物跡(7棟)



▲ 5棟の掘立柱建物跡の配置のようす



▲ 柱穴を輪切りにしたようす  
中央に見える黒い土が実際の柱の穴

40個あまりの柱の穴だけが密集している区域がありました。これらは大きさや形(方形のものと丸いもの)、柱穴の深さ、並びからグループに分けることができますが、全部で6棟の掘立柱建物跡が確認できました。少し離れたところにある1棟を除き、5棟は同じ場所に建て替えられています。調査区が狭くいずれも全体を把握することができませんでした。これらの柱穴は、柱自体の太さよりも数倍大きな穴を掘り、柱を据えてから周りに土を入れた様子がわかるものもありました。

土師器や須恵器の破片が出土する柱穴もあり、平安時代に属するものと考えています。この区域以外でも多くの柱穴が見つかったので、掘立柱建物跡の棟数はさらに増える可能性があります。

## みぞあと 溝跡(12条)



▲ 溝の中に土が堆積したようす

多くの溝跡が見つかりましたが、何らかの境界を示す区画の溝や単に水を流すために用いられたものがあるようです。中でも写真の溝跡は幅が1.3m、深さは1mもありました。詳細な時期は不明ですが、平安時代以降の溝跡と思われます。

## いろいろな土坑(42基)

今回の調査では、多種多様な土坑が見つかりました。①円形の土坑、②長方形の土坑、③方形の土坑、④粘土を採取したと思われる土坑、⑤二つの穴が連結している土坑、⑥焼けた土の粒が多く含まれている土坑などです。



▲連結する土坑



▲焼土の粒がたくさん混入する土坑

## 出土した遺物

竪穴住居跡や土坑から見つかった奈良・平安時代の土師器や須恵器などのほか、黒曜石製の剥片、剥片石器、小刀・釘などの鉄製品類、土製紡錘車などが出土しています。遺物の総量は、当センターの中コンテナで8箱ほどです。



▲竪穴住居跡から出土した遺物  
このように遺物は出土します



▲遺物洗浄のようす  
雨の日などには遺物を洗っています

## おわりに

今後、調査は事務所西側の調査区に移ります。遺構の密度は東側調査区には及びませんが、平安時代の住居跡や土坑、溝跡などが確認されています。調査終了後は、出土遺物も詳しく検討し、ここに暮した人々の生活の一端を探っていきたいと思います。

X=95800

X=95800

X=95800



00112&gt;A

00112&gt;A

00112&gt;A

00112&gt;A



- 本調査区  
 □ 確認調査区  
 ○ 竪穴・住居跡・住居状遺構  
 ○ 土坑  
 = 溝跡  
 ○ 柱穴

作屋敷遺跡-11 遺構配置図



遺 跡 名：作屋敷遺跡  
所 在 地：奥州市胆沢区南郡田字独光287ほか  
事 業 名：経営体育成基盤整備事業都島2期地区  
委 託 者：県南広域振興局農政部農村整備室  
発掘調査期間：平成23年4月26日～8月31日(予定)  
調査対象面積：5,190㎡